

「未来につなぐ町の礎」（余市町長 齊藤 啓輔）

〇はじめに：7年の歩みを振り返って



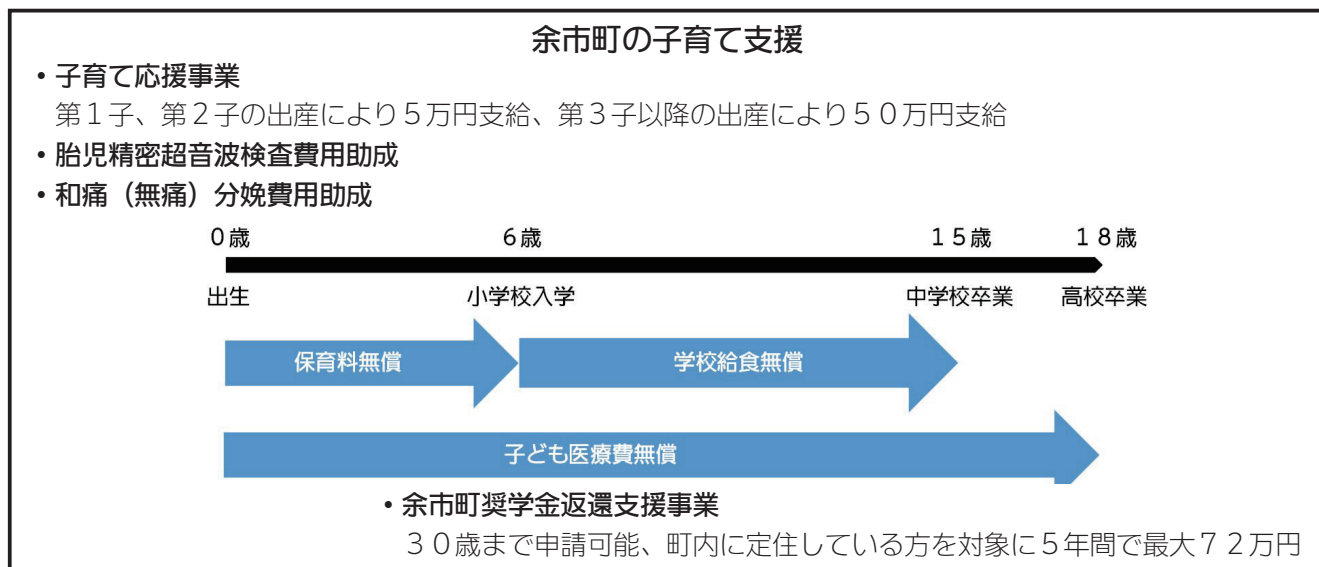
「にのみやそんどう道徳なき経済は犯罪であり、経済なき道徳は寢言である」という言葉は、二宮尊徳の思想を象徴する表現として広く知られています。本人の著作に明確な記載はないものの、道徳と経済の両立という理念は報徳思想を通じて今に受け継がれ、地域経営やまちづくりにも深く通じるものだ、と私は受け止めています。

町長としてこの7年間、政策を決断するたびにこの言葉の重みを感じてきました。町民の暮らしを守る政策を進めたい。しかし財源には限りがあり、現実の中で最善を選び取らなければならない。夢や理想を語るだけでは、町政は動きません。その夢を現実に落とし込む「構想力と実行力」が何よりも求められています。

〇子育て支援の拡充と、そこから浮かび上がる新たな課題

私が町長に就任してから7年が経過し、現在8年目に入りました。この間、特に直近の3年間で私たちが進めてきた施策の中で、最も多くの町民の皆さまに実感いただけたのは、子育て支援の無償化です。

現在では、小中学校の給食費を完全無償化し、保育料については0から2歳までの世帯負担もゼロに。医療費については18歳まで無償にし、出産祝い金（第1子・第2子5万円、第3子以降50万円）や奨学金返還支援制度も設けました。さらに、胎児精密超音波検査や和痛（無痛）分娩への補助制度を創設し、出産を控える女性の不安軽減にも取り組んでいます。



こうした一連の施策によって、子育て世帯が感じる将来不安を少しでも軽減したいという思いがありました。

しかしその一方で、今、放課後児童クラブや保育所で“人が足りない”という問題が顕在化しています。制度は整っているのに、預けられない。これでは本末転倒です。

全国的な保育士・支援員不足という構造的な課題が背景にあり、いくら予算をつけても人材確保が追いつかないという現実、に、私たちも直面しています。

理想を語ることは簡単です。けれども、それを実現するには「人」と「金」という現実と真剣に向き合わなければならない。まさに「経済と道徳のバランス」が、この子育て支援の現場でも色濃く表れています。

〇全世代に目を向けた町政へ

私たちが取り組む町政は、決して子育て世代だけを対象としたものではありません。すべての世代にとって“生きやすい町”を目指し、政策の幅を広げてきました。

高齢者の皆さまに対しては、冬季の除雪支援をはじめ、デマンドバスの運用、地域包括支援センターを軸とした相談・見守り・在宅介護支援体制の強化などを進めています。単なる福祉ではなく、地域におけるつながりの再構築を大切に「暮らしのインフラ」を整えてきたつもりです。

〇ワインだけじゃない、余市町の国際化戦略

この1年、余市町は“世界とつながる町”として、大きな一歩を踏み出しました。

2025年2月、フランス・ブルゴーニュ地方の銘醸地、ジュヴレ・シャンベルタン村と親善都市協定を締結。世界屈指のピノ・ノワール産地であるこの地との関係構築は、単なる象徴的な友好ではなく、生産者どうしの技術交流や観光・文化連携、教育面の交流など、多岐にわたる実務的な連携を視野に入れたものです。

また、世界的音楽家でありワインブランド[Y by YOSHIKI]のプロデューサーでもあるYOSHIKI氏が、余市の地で新たなワインプロジェクトを開始。世界展開を視野に入れた“日本発のピノ・ノワール”に挑戦するという壮大な構想が動き出しています。

さらに、北後志各市町村との広域連携も着実に進展し、ワインだけでなく、食・農・観光全体を一体的にブランディングする基盤が整ってきました。私たちが進めてきた「一点突破・全面展開」の戦略が、いま着実に果実を結びつつあります。

〇財政は厳しくても、諦めなかった

町政の根底には常に「財源」の問題がついてまわります。どれだけよいアイデアがあっても、予算がなければ絵に描いた餅。けれども、町税収入に限界がある中で、私たちは“財源を生み出す自治体”であることを目指してきました。

私の就任前年の平成29年度、余市町のふるさと納税額はわずか5,800万円でした。それが今では15億円を超える規模に成長。北海道の自治体でも上位に名を連ねるまでになりました。さらに企業版ふるさと納税についても、着実に実績を積み重ねており、町の成長を後押しする貴重な財源のひとつとなっています。

いまや、給食・保育の無償化に必要な費用（給食：約6,000万円／保育料：約2,000万円）も、町民の税金ではなく、全国からのご寄附によってまかなうことができます。

また、道の駅整備、一次産業への支援、スポーツ施設、教育ICT、小中学校へのクーラー設置などの事業についても、国の補助制度を最大限に活用することで、町の持ち出しを最小限に抑えながら、多くの事業を前進させてきました。

〇“いない町長”と言われる理由

「町長はいつも町にいない」一。これは私が最もよく言われる苦情かもしれません。けれども私は、あえて言わせていただきます。「町の中だけにいては、町の未来はつukれない」と。

私の仕事は、庁舎内で机に座ることではありません。24時間365日どこにいても、アンテナを張っており今後の余市町の戦略に思いを巡らせながら、外に出て、人と会い、町の魅力を語り、応援団を増やし、財源を持って帰る。それこそが、首長としての真の責務であると信じています。

役場の中では、副町長をはじめとする優秀な幹部職員たちがしっかりと舵をとり、意思決定はすべて電子化されています。つまり、私は「物理的にはいないけれど、常に決裁の中心にはいる」町長であることを、改めてご理解いただければ幸いです。

〇見えてきた「町のかたち」

この7年、私は「よそ者の目」で町を見つめ、「内側の手」で現実を変えてきたつもりです。

外に出て知った“他所の強み”を、余市に応用する。町民から聞いた“生活の声”を、制度に反映させる。役場の中で聞こえにくかった声も、私は現場で拾い続けてきました。

農業、漁業、教育、インフラ、防災、観光、デジタル、広域連携――。町は静かに、しかし確実に変化し、成熟し、次の時代への準備を始めています。

誰かが変えたのではありません。町民の皆さん、そして役場職員一人ひとりの力があってこそです。

〇終わりに：未来をつなぐ礎として

私は、町の“主人公”は私ではないと考えています。主役は常に町民であり、町外で応援してくれている皆さんであり、次の時代を生きる子どもたちです。

私はその「黒子」として、土台を整え、風土を耕し、光が届くように障害を取り除く。その役目が、もうすぐ一区切りを迎えようとしています。

この間に、まいた種は芽吹き、花を咲かせ、いくつかの果実を実らせ始めました。そして今、その果実をどう未来へ渡すか。まさに「礎」を築く仕上げの時期です。

私は残りの任期も一日一日を無駄にせず、丁寧に町を耕し続けてまいります。変化を恐れず、信念を曲げず、これからも町政を前に進めていきます。



▲ フランスで行われた協定式